

障子張り



「相模国入道時頼の母 松下禪尼」の話と言って通じるとしたら、もつ十分年代が知れてしまつ。かつて小学校を国民学校と言つていた時代の五年生の国語の教科書に載つていた話である。

その教科書で習つた恐らく最後の学年は、六年生で終戦を迎えた私たちで、それが今年は七十歳を迎えるのだから、もつ知らないのが当たり前と言つても不思議はない。それは要約すると、鎌倉時代二代の執権北条時頼はある日、母の松下禪尼が障子の切り貼りをしているのを見て、何故そんなことをしているのかと尋ねる。禪尼は物の大切さを説き、節約の心が皆の手本となるようにと貼つているのだと答えるという話である。

戦前まだ物資の不足していなかつた私の幼時でも、

明治の祖母は丹念に孫どもの破つた障子を切り貼りしていた。小さな穴を塞ぐ梅や桜、銀杏なども上手に切り抜かれていて、結構アクセントになっていた。祖母は私が小学二年生の時に日米開戦を知らずに亡くなつたが、その思い出も松下禪尼と重なつた。

我が家の子供たちの小さい頃は東京の公団住宅住まいで、窓の内側は障子だつたが、たつた一枚だつた。マンション暮らしになつてからは障子とは全く無縁になつた。入来の建て替えた家は、和室が主なので大きな障子が十二枚、中窓が十枚もある。築八年になるがまだ殆ど切り貼りで済ませている。

と言つても寢室の四枚は同居している猫に破られて、正月前に張り替へたことが何回かあつた。猫はきちんと張り替へられると、自分から破くことはないが、何かの弾みで一か所が破れると、どんどん破いてしまつ。今は成猫ばかり三匹になつて、そんなにひどくは破らないが、子猫の頃は、破れた所じゃれて、たちまち上の方までボロボロになつたものだつた。

さて話は平成十四年の暮れのことになる。公民会長の夫は、公民館の大掃除をするからと、例年通りに年末の土曜日の午後、役員を集めた。副会長兼兼計、婦人部長、班長など十五名ほどで、男衆は庭の草取りや掃除、女衆は館内のお掃除を皆でやるのだ。私は障子張りの担当で、メリケン粉で糊を煮て、それを延ばすお盆と糊刷毛、それに我が家の使い残しの障子紙を持って出掛けた。

我が麓下公民館は、戦後に住民の篤志家が岡本さんの屋敷を買って、公民会にと寄付してくれた土地に、住民が自ら山から木を切り出して建てたものだ。炊事場部分は建て替えられた小学校の教室の一部を利用してあるのだ。古くカタが来てはいるが、昨今の町からの補助金で造られた物とは異なり、公民会員の公共心の賜物で、住民の愛着のひとつの建物と言える。

岡本邸の庭も一部残っていて、枯山水の池や植え込みもあり、一寸した運動会も出来るスペースもある趣のある公民館である。

建物内は広い十間と炊事場、座敷は十畳一間続きである。床の間を障子がコの字に囲んでいるので、障子は二十枚もある。去年は五六箇所の手貼り何箇所かの穴塞ぎで済ませていたので、今年もその程度でよいだろうと思っていた。

ところがよく見ると、何枚かの古い透かし柄の入った障子紙のものは虫が食っていて、かすれたよつな穴が無数にあるではないか。今年の当番の女性七人には、小中学生のママさん、いわゆる中堅の婦人たちが四人も居て威勢よく座敷の掃除をしていた。私が後巡しているのを見て、いつそのこと全部張り替えよつと言い出した。ところが悲しいかな、そこは戦中派の私には、一三年前に張り替えた何処も破れていないものまで張り替えるのは躊躇してしまつたのだ。

「今は一枚ですつと貼れるから簡単ですよ。私が障子紙を買って来ます。」

と元気のよい一人が言つた。それではと私は少しでも破れているものは全部張り替えることにして、六

枚を指定した。先程のママさんが夫からお金を預けると早速Aコトブに買いに車で出掛けた。残りの三人は「セーノ」とばかりに、六枚をパツパツと外して庭に持ち出した。ホースで水を掛けて手早く紙を剥いで洗い上げ、影干しをする。その手際のようにと。私は縁側で眺めているばかりだ。

細長い筒状の紙が来た。一本で四枚貼れるということで二本買ったという。水の切れた物から縁に運び込む。昔は逆さにして立てかけて三十センチ程の幅の紙を、巻紙を読む時よろしくクルクルと一段ごとに貼って行ったものだが、一気に貼れるということ、私は家から下に敷く新聞紙を沢山持つて来た。縁にそれを広げ、枠を載せる。一人がサツサツと糊を刷き、二人が紙の左上の位置を決めてザーツと紙を広げて押さえ、右端の十センチほどの余分をカッターでサツツと切るとそれで一枚上がりである。ワイワイと賑やかに瞬く間に出来上がった。

「今年の役員は若い人が多くていいね。今年度の内全部張り替えてもらいましょうよ。」

私と同じ年のMさんが言う。座敷に収めた新しい紙の障子の明るさを見ると、私も若い人達の言うことを聞いて、全部張り替えたらよかったなとちよっぴり後悔した。

公民館の障子は腰板が高いので、四枚分で六枚貼ることが出来た。残りの一本は物置に仕舞う。私は紙巾が余分で切り取った十センチ巾の長い紙も、切り貼り用に仕舞っておこうと思っただが、若い人たちは平然とクシャクシャと丸めてゴミにってしまった。この辺の私たちの感覚は、若人には到底理解してもらえないのかもしれない。

何はともあれ、我が町の中堅ママさんのパワーは頼もしい。新能を実行してのける男性のパワーも凄いが、男女相まって町の未来は美に明るいと感じたことだった。

